

大学の運動部活動における組織風土とバーンアウトに関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1314010 大森 真生

1. 研究動機・研究目的

本研究の動機は、私が大学運動部活動に所属していた時期に遡る。

私が以前所属していた部活動には、毎年秋に大切なリーグがあり、選手たちはそのリーグでメンバーに入るのか、入らないのかという問題に悩まされていた。メンバーに入ることができるのは3分の2で、メンバーに入ることのできない3分の1は試合の運営や手伝いなどを行い、試合に出るメンバーと試合に出ることのできないチームメイトの間にはピリピリとした雰囲気があった。私が大学の運動部活動に所属していたのは2年間だけだったが、結局秋のリーグの試合には一度もメンバーに選ばれることがなく、途中で自分の目標を見失ってしまい何のために競技を行っているのかがわからなくなり、運動部活動を辞めてしまった。相談できる仲間はいたものの、その時々チームの雰囲気に疑問を感じることもあり、試合に出るために自分にできることを必死に行っても、なんとなく報われない思いが心に残っていたことを今でも覚えている。

また、私の友人の一人は、大学在学中に自身の競技に対し、練習意欲がわかなくなり、半ば燃え尽き状態に陥った後、精神不安定のために病院に通わなくてはならなくなってしまった。友人の体調を心配すると同時に、友人がこのような状態に陥ってしまったのには、友人自身の競技成績だけでなく、友人が所属していた組織の中に何か問題があったのではないだろうか。いつからか私の中には、そのような考えが沸々と浮かぶようになり、友人のためにも、そして今後このような深刻な状態に陥ってしまう大学生スポーツ競技者を出さないためにも、組織風土とバーンアウトの関係について研究していこうと考えた。

本研究では大学運動部活動におけるバーンアウトと組織風土の関連について、大学生スポーツ競技者版バーンアウト尺度と組織風土尺度を用いてその関連を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2017年10月10日から10月29日にかけて、スポーツ系の学部の運動部活動に所属する大学1年生から大学4年生の大学生476名を調査対象とし、質問紙調査を行った(有効回答率89.1%)。質問紙調査にはフェイスシート、大学生スポーツ競技者版バーンアウト尺度と組織風土尺度を用いた。フェイスシートでは、性別、年齢、学年、所属部活動名、現在行っているスポーツの継続年数、現在所属するチームでの役職、現在の立場を尋ねた。

大学生スポーツ競技者版バーンアウト尺度は、「対人情緒的消耗」「個人成就感の欠如」「練習情緒的消耗」「部活動に対する価値下げ」の4因子20項目から構成され、回答方法は5件法である。組織風土尺度は、「クラブ中心の統制」「自由なコミュニケーション」「イノベーションの受け入れ」の3因子20項目で構成され、回答方法は5件法である。

3. 主な結果と考察

本研究によって、大学生スポーツ競技者におけるバーンアウトと組織風土との間では、相関関係が確認されないという結果が出た。これは、大学の運動部活動において、組織風土が良好であるほど、バーンアウト得点が低いという仮説を支持しないものとなった。

本研究は、1つの大学のみで行い、その中で性別や学年、立場や競技によって結果に差が出るのかということを確認したが、大学生スポーツ競技者が部活動以外の別のストレス者に曝されていることへの考慮やバーンアウトの度合いと組織風土への質的な調査も必要だったのではないかと考える。特に、バーンアウトに関しては、個人差が激しいため、精神的な状態と身体的な状態の両面からその度合いを測るべきであった。また、個人の部活動へのモチベーションやメンバー・監督との関係性なども本研究で調べることができなかったが、バーンアウトと組織風土の点数が変化する原因となりうるため、調査が必要だったのではないかと思われる。

本研究は、組織風土がバーンアウトの発生にどの程度影響力を持つのかについて示すことはできなかったが、先行研究はない新たな結果や視点というものも示すことができたのではないかと考える。

4. 結論

大学生スポーツ競技者におけるバーンアウトと組織風土の間には、相関関係が確認されず、大学生スポーツ競技者の性別とバーンアウトの間においても、相関関係が確認されなかった。

学年とバーンアウトの間には、「個人成就感の欠如」と「部活動に対する価値下げ」の2つの項目で低学年と高学年の差が確認された。なお、低学年よりも高学年の方がこれらの得点の値は高かった。

また、大学生スポーツ競技者の現在のチームでの立場とバーンアウトの間には、僅かに相関関係が確認された。大学生スポーツ競技者の「個人成就感の欠如」は、「レギュラー」か「それ以外」であるかによって大きく変わるといえる。

所属部活動による組織風土とバーンアウトにおいて、イノベーションの受け入れがなされやすい部活動は、バーンアウト傾向が低いということがいえる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、多くの皆様のご指導ならびにご支援を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

指導教官である水野基樹先生には、本論文の執筆に際して、大変親切かつ細やかなるご指導ご指摘を賜り、スポーツ経営組織学研究室の大学院生の方々には卒業論文提出の直前まで、添削やアドバイスなどをいただきました。大変お世話になりました。

大きな大会やリーグ等がある中、忙しい時間を縫ってアンケートにご協力くださった多くの方々のおかげで、本論文の執筆を無事終えることができました。ご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。

最後に、本研究によって、スポーツ競技を行う大学生が、スポーツを行う上で心身の健康を保ち、自身の競技成績を向上させていくことの一助となれば幸いです。